

ぼくの「ウォーホル」日記 美術家 渡名喜 元俊

『アンディーウォーホルについて知りたいなら、僕の映画、僕の表面を見るだけでいい。そこに僕がいる。裏には何も無い』

かなり挑発的な言葉だ。ポップアートとしての最も有名な言葉である。自己表現を核にする近代絵画の理念からすると理解しがたい内容であり、何かがウォーホルは違う。

1969年、琉球大学に入学した。学園はいわゆる『全共闘』の渦の中で激動していた。全共闘と革マル派が旧土木ビル、法政ビルにバリケードを築き、屋上からゴムカンで石を飛ばし、中世の騎士よろしく竹槍でつき合い、手動マイクでオルグ合戦。キャンパス内は騒然とした状況であった。入学間もないころ、投石のただ中を隊列を組み、ジグザグに行進しながら琉大の坂道を駆け迫る一団の全共闘勇姿を目撃したことが、僕の精神的な始まりである。ウォーホルの芸術の出発点はシルクスクリーンとの出会いだ。シルクの反復作用に戦慄を覚えた彼は1962～1963年にかけてあの有名な「キャンベルスープ」「マリリン」等の作品を発表した、最もスキヤングラスなポップアーティストとしてのデビューを果たすことになる。

1972年、大学時代の仲間と数名で「赤色幻影」という芝居を主催する。入場料25セント、会場、やぐら。「おかあさん」というセリフで終わる。感動的なナルシスト劇(?)であった。その頃の愛

読書は「美術手帖」「現代詩手帖」「ユリイカ」等でありだれも皆、サルトル「嘔吐」、カミュ「異邦人」、カフカ「変身」吉本隆明を読んでいた。



『もっと多くの者がシルクスクリーンをつかい、しまいには僕の絵が僕の作品なのか、ほかの者の作品なのか誰にも見分けがつかなくなったらすばらしいだろうと思うね』

1975年、卒業。宮城陶房でろくろを回す。

1977年、美術工芸科へ編入学。基礎デッサンを勉強する。10年違いの学生と共に受講することになった。時代はかなり穏やかになっていた。もうあの頃の熱気はなかった。ただ、ただ勉強にいそしんだ。美術というコンテキストの中でウォーホルがどういう位相のアーティストなのか解ったのはその頃だ。一方に大学の理念があ

り、一方に現代アートの現象がありそして現在の時空で生きる自分が在る。その三つ巴の現実から理念の構築、それが僕が果たさなければならぬ急務だった。

1980年、二度目の卒業

1989年、◎シリーズの発表、僕のデビューだ。このシリーズは一生やりたかったのだが、一万個以上描いたのでやめることにした。カミュのシシュポスの神話、ジャスパージュンズ、ウォーホルを彷彿していると思い、ニューヨークのOK・ハリス画廊に行き「どうですか。」と聞いてみると返事は「No Need」。東京の「なびす画廊」の峯村さんの所でも個展をした。いろいろな美術館の学芸員さんは来てくれたけれども、鳴かず飛ばずという状況だった。

『やがて、すべての者が15分ずつ有名になる日がやってくる』

1993年、真喜志勉氏とウォーホルについてトークショーをオフでした。僕の水玉のエンピ服を見て氏はビックリした様子。ウォーホルのことを思い出し勉強もした。やはり彼は天才だ。マルセルデュシャンに匹敵する作家だ。おそらくジョーンズとラウシェンバーグは歴史の波で消えると思うがウォーホルは、フランスの帝王マルキ・ド・サドと同じ意味で「のぞき」の独身者、ファシュナブル・ゲイ、フリーク、ネクロフェリアとしてはるか地下の水脈から眼光を闇に観ずえて生き続けるだろう。

1994年 僕の夢は『オープン・ハウス』だ。

『あらゆるものは美しい』

(となきげんしゅん)

Adlib 広告制作事務所
アドリヴ
〒901-21 浦添市宇勢理客527 ☎0988(77)6535

* 額縁の専門店 *
合資 前田額装商会
会社
〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(098)667-4811 FAX(098)861-0367

パリの画商は語る

1993年10月パリに行く機会を得た。短期間の旅行だったがパリの美術状況やギャラリーの様子を直接自分の目で見る事ができた。その際、パリで制作活動をしている幸地学氏の作品を一手に引き受けているクロードギャラリーのオーナーであるクロード氏にパリの美術状況や画廊のあり方についてインタビューする機会を得た。

クロード氏のギャラリーはモンパルナスのギャラリーの立ち並ぶ一角にある。1階と地下1階のこじんまりとしたスペースには幸地学氏の作品が置かれている。

インタビューはクロード氏のギャラリーで行った。まずはじめにパリの美術状況(マーケット)から聞いてみた。

◇美術状況について

マーケットについて話していく場合にはいくつかのマーケットの種類に別れていきます。大まかに挙げれば、クラシックの傾向性のもの、印象派、コンテンポラリーアート、その中でも、印象派やそれ以前の作品はなかなか手に入りにくいし、値段が高くて一般の人たちには手が届かず、一部のコレクターや大手の企業等の間で買取がなされている。その反面、現代アートはダイナミックで可能

性に満ちているし、マーケティングを開くおもしろさがあると思う。そこで、現代アートを扱っていく上で重要な点が二つあります。まずひとつは、美術という観点から優れたアーティストを選ばなくてはならないこと。もうひとつは、選んだ作品を商売として成

のを持っていますから、その中から顧客をいかにつかんでいくか、努力が必要になってきます。いかに人目を引く企画をしていくかということ。そのためには金銭面でも予算がかかります。洗練されたもので、オリジナリティーにあふれた、思いきった動きをして行か



クロード・ギャラリー前にて(左端クロード氏、右端に幸地氏)

り立たさなくてはならないということ。どんなにいい作品であったとしても売れなくては意味がないわけですから。自分の目で見て選んだ作品をどのようにして表舞台にだしていくのか、打ち出し方にもいろいろある。パリのような世界の大都市で何百という画廊があって、それぞれが洗練されたも

なければならない。

◇現代美術の動き

現代美術について話していく場合、これまではエコール・パリだとか、アメリカのテキサタン表現主義だとか、フランスではヌーボー・レアリストという運動が70年代から80年まであって、それで美術が動いていた。でも

地元のビールが断然うまい
最も新鮮

オリオンビール

國場組グループ

國 和 會

会 長 國 場 幸 治

80年代からここ10年間はグループ化された運動がなく、その代わり注目されているのが個人のパーソナリティーです。つまり一人一人のアーティストがどのようにして現代アートを表現していくのか、個人化されたパーソナリティーで個人の持っている気質をどこまで出すことができるのか。そこでギャラリーの選択眼が重要になってきます。これまでのように美術館とか評論家が評価したもので画廊も評価をしてしまうのではなく、画廊自身が新しいものを発見し育てていくことが必要になってきます。画廊自身が動くことで美術に対する社会的な役割を果たす事ができます。

◇画廊・作家・コレクターの関係

画廊にいらっしゃるお客さんは画廊の取り扱っている作品はもちろんのこと、それを扱う側にもとても関心があります。それは作品を買う側にしてみれば何十万、何百万とお金を出すわけですから、当然信用のある画廊を慎重に選ぶ必要があります。そこで画廊、作

家、コレクターの結びつきが重要になってきます。画廊は自分自身で選択した作家に一生をかけて取り組んでいくぐらいの真剣な気持ちでいなければならない。

◇アジアについて

最近アジアの芸術家が注目されてきているが、パリではどうか。

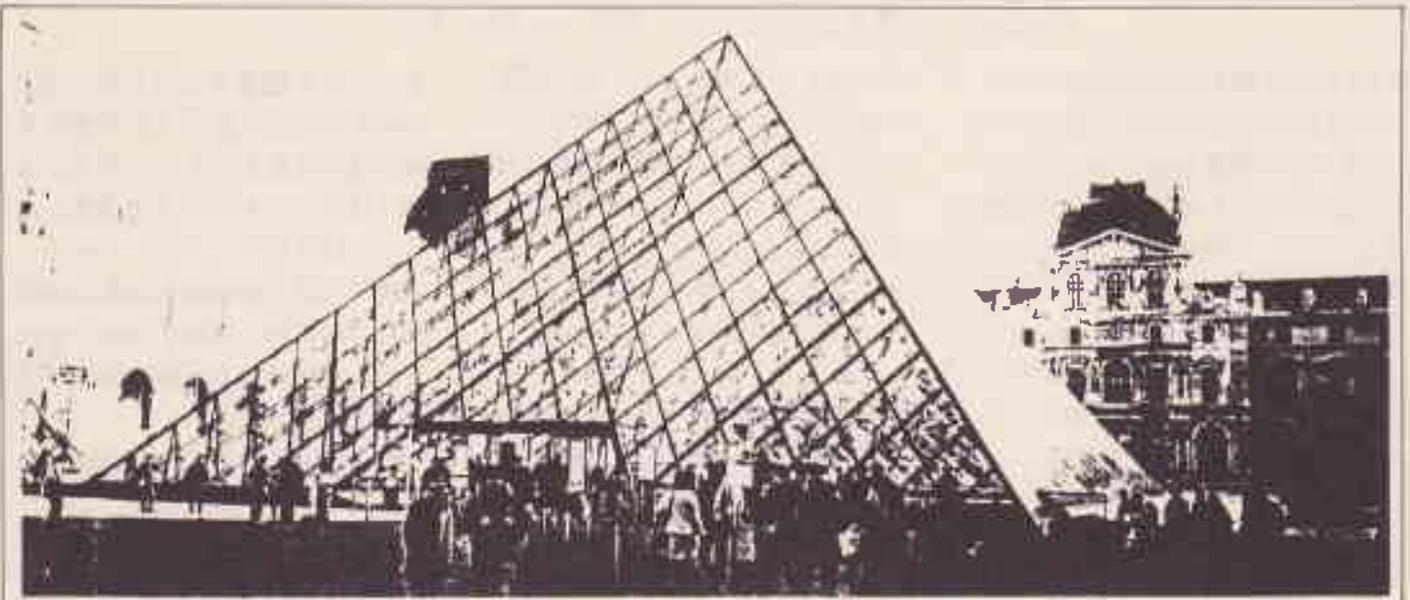
今アジアが注目されてきているのは、経済的に成長の過程にあるということが大きな要因になっていると思う。それから政治的な面においても世界の政治界に顔を出すようになってきている。これまで人任せにしていたことを、どんどん経済的な面で力をつけることで主張することが出来るようになり、その中に美術が同乗してきているわけです。経済的な動きが美術の流れに大きく影響している。アジアはこれまで西洋からの流れの中にあり、西洋の影響を大きく受けてきた。ここ何年か力をつけてきたアジアは独自のマーケットを作り始めています。アジアの作家に集中して作品を買い求めブームを作り、アジアのマーケティン

グを守ろうとしている。それは悪い意味で言えばナショナリズムで人種や宗教、経済、政治などにかたよってしまい純粹の芸術という純粹な部分が見えなくなってしまう。

◇画廊のあり方について

企画画廊でやっていくことについて、どのような考えで取り組んでいっているのか。

パリには何百というギャラリーがありますが、私のギャラリーは自分自身で選んだ作家の作品を扱う企画画廊です。ギャラリーには印象派やフランドル絵画、近代美術などのコレクションを持っていて、それを企業や美術館に売ることを専門にしているギャラリーや、現代美術を取り扱っているギャラリーでもある程度名の知れた作家を大手の企業をバックにつけてその財力や宣伝効果でもって作品を売っている。そのようなギャラリーではなかなか若い作家は取り扱ってはくれない。その点では自分自身のギャラリーは財力はないけれど、5人ぐらいの若い



終日入館者であふれるルーブル美術館



首里の銘酒(本場泡盛)瑞泉
瑞泉酒造株式会社
 沖縄県那覇市首里崎山町1-35 TEL(098)884-1968



RISTORANTE

松尾亭

〒900 那覇市松尾1-5-7 (豊島ブランドホテル)
 予約/TEL (0988) 62-6161
 年中無休

アーティストに力を入れていません。その中で作家との関係、作家活動など緊密な関係を作って仕事を進めていくことを方針としています。でも、それは簡単なことではありません。でも若いアーティストを育てることで顧客をどんどん開拓していき国際的なマーケティングまで持っていくことは大きなパッション（情熱）があります。しかし、同じ画廊でも投資だ

ティストのバランスが取れたときにいい仕事ができる。

* * *

インタビューは幸地氏の通訳により行うことができた。予め質問内容を伝えてもらい、クロード氏に答えてもらう形をとった。

パリにおいても現代アートを浸透させていくことの大変さを感じ

た。

* * *

初めて訪れたパリはどこを撮っても美しい街並を見せてくれる。でも、その表に見せてくれる美しさとは別に、その歴史の厚みを肌で感じさせられ圧倒されてしまう。美術館やギャラリーを時間の許す限り観ることができた。美術館では名画といわれる作家の作品



ギャラリーの立ち並ぶ サンジェルマン・デ・プレ

けに目的を持ち有名な作家だけしか扱わない画廊だとか、若い作家を扱わない画廊もあるが、その中でも若い作家を捜してその可能性にかけていく画廊もある。だから画廊にもいろいろなタイプがあります。また、アーティストにもいろいろなタイプがあって、すべてのアーティストがいい仕事をしているわけではない。画廊もいいアーティストを探しマーケティングが開くように打ち込むし、アーティストもそれにかなうような仕事をする。要するに画廊側とア-

ずには入れなかった。特に印象に残ったのが作家を選ぶ場合において、美術館や評論家の評価に任せるのではなく、あくまでも自分自身の目で作家を選ぶことである。そして、作家を育てあげるためには一生をかけてでもやっている意気込みがあることである。沖縄におけるギャラリーのあり方と比べることはあまりにも歴史的にベースが違おうと思うが、画廊という仕事について、作家に対する姿勢について、いろいろな課題を抱えさせられるインタビューだっ

をいつでも鑑賞することができ、美術を日常的に受け入れる慣性を幼い頃から育むことができる。本物に接することのできる環境にあることは素晴らしいことである。沖縄でも県立美術館の建設計画が進んでいるが、沖縄の美術文化のためにも価値のある美術館ができることを祈りたい。

短い期間ではあったが異文化に接することで、自分自身の生まれ育った沖縄を見つめ直すきっかけになる旅だった。（当間）



ひとにいつも新しく一生活共感企業

りゅうせき

本社：沖縄県浦添市西洲2-2-3 〒901-21
TEL 098-875-5000 FAX 098-875-0270

絵画・洋食用品・陶芸用小物・電動カ、額縁制作



CULTURE PLAZA

株式会社

みつや書店

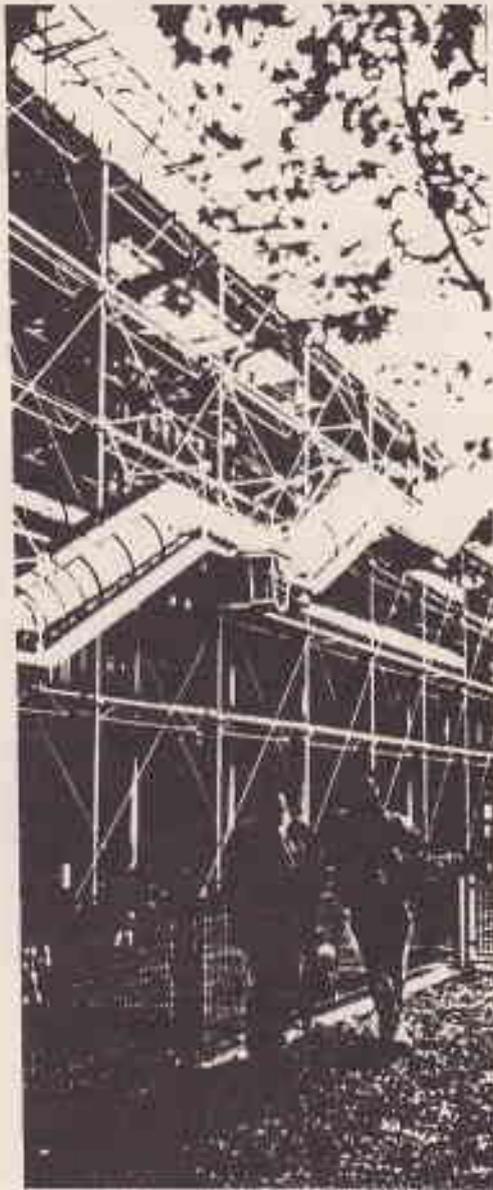
〒902 沖縄県那覇市壹屋1-1-3 ☎(098)863-1650代

ピカソ美術館

先々月、バリの中で最も古い地域にあるピカソ美術館を訪ねた。これまでピカソのキュビズム以降の作品には、それ程興味を持っていなかったが、今回は画集では見られなかった作品を含め、実物を見て新たな発見があった。まずバビエコレ（貼り紙）の小品はステラの巨大な立体作品をすでに予感させるし、絵の色彩やフォルムには、ニューペインティング等の現代作家が見え隠れしている。彫刻に至っては、まさに現代彫刻そのものだった。すでに古典的だと思っていたピカソが、ある意味で今だに現代美術に強い影響力を持っている事に新鮮な驚きを感じた。また、ピカソの作品は年代ごとにいろいろ変化し、多彩なスタイルや表現方法があるが、よく見るとピカソの根底には、人間像を中心とし、常に対象にこだわった作品を創っている事がわかる。その中で気に入ったのが、マリーテレーズの一連の作品だ。以前は手抜きとしか思えなかった作品が、今の自分の感覚にぴったりと合った。また、陶器も自由奔放で明るく魅力的だった。

さて次に、ピカソ美術館の特長だが、17世紀に建てられた個人の大邸宅を改築して作られたこの美術館は、こじんまりとしておりみる順路が年代順になっていてわかりやすい。石造りは冷たいというイメージがあるが、やわらかい光がほのかにあたたかさを感じさせる。ピカソの情熱的な作品から放出されるエネルギーの緊張感と全体的に落ち着いた雰囲気が微妙

gallery
man & woman



ボンピドゥー・センター前にて
なバランスを持っていて居心地が良い。何度でも足を運びたいような美術館である。

先日、彫刻家の戸谷氏が来沖した際に、美術館は新しく建てるというより現在ある建物を利用して美術館にしたらいいと言っていたが、この言葉から考えるに今問題になっている旧立法院を天久の開

放地に移築し、地下を作って美術館の一部にしてみたらどうだろうか、一挙両得になると思うのだが…。(長嶺 豊)

自立ということ

「女性が独り暮らしを始めるといふ事ないよ」と周囲が言う中で、アパートを借りることにした。社会的に独身女性の独り暮らしというのは意外と風当たりが強い。まず両親を説得するのに半月はかかった。「結婚するまで実家において貯金するのが賢明。無意味なことをするな。」と言っていた。沖縄での住宅事情や経済な面をあれこれ考えると、余りにも不利な条件が多かった。

先日行ったフランスでは、物事を提議する場合において、日本では考えられないほどの世論があるらしい。フランス人はヨーロッパの風土、気質の中で最も個人主義が強いといわれており、彼等の多くは早くから自立するのがあたりまえで、若い人でも日常をとおして政治、経済、文化がどのように自分自身に関わっているのかを常に考えているようだ。それらは歴史ある街並や、近未来的な建築物など世界に誇れる都市づくりに十分反映している。人々の生活、文化意識の高さが見受けられた。

沖縄は共同体意識が強く、親の子離れ、子の親離れが難しいといわれている。自立することにも様々な理由があると思う。その中で、私は経済的な自立をとおして問題意識を常にもち、積極的に社会に参加し、本当の意味での自立をしていきたい。

(きんじょうかずみ)



絵画(油彩・水彩・版画)の専門店

画廊 沖縄

〒900 沖縄県那覇市家崎2-2-3 ☎098334-6760

CREATIVE OFFICE

SHINJO Vib CREATION

プランニング(企画)

S.V.C

マネージング(経営)

〒900 那覇市牧志2-13-15・501 ☎(098)867-9999

GALLERY WORK-II

貸画廊のご案内

平成6年度よりGALLERY WORK-IIは貸画廊としても運営していく運びとなりました。

現代アートを表現していく空間として、特に県内の若手作家に利用してもらうのが目的です。

使用規定

- 期間：6日間（月～土曜日）
AM11:00～PM7:00
※6日間単位として2週間の利用も可（ただし最終日は搬出のためPM6:00まで）
- 使用料金：1日（1万円）
※アシスタント付きの場合
1日（1万8千円）
- 搬入・搬出：土曜日
PM6:00より搬出
PM7:00より搬入
- 原状回復：使用終了後は、備品等を原状に戻して下さい。
（壁面に釘の使用可）
- 付属備品：スポットライト、彫刻台（W35×D35×H80）10個、テーブル、湯飲み用具等
- DM（案内状）：DM作成費及びDM郵送費は作家負担
※DM作成・1000枚・製作費3万円（版下製作費7千円込み）
※DM用写真・ポジまたはプリントは作家持ち込み（画廊にて版下を作成する場合、文字はワープロ文字）
- 申込先（詳細）は當間までご連絡下さい。
☎（855）7933

GALLERY WORK II

企画予定

第3回美術オークション

2月7日（月）～13日（日）

今年も美術オークションの季節がやって参りました。シャガールやルノアール、ピカソ、モジリアーニ、ルオー、ブラック等の版画を数多く取り揃えました。皆様のお越しをお待ちしています。

江木 健 展

3月21日（月）～26日（土）

東京芸大卒業後、県立芸大で助手を務める江木さん。4月からのドイツ留学を控え、これからの活躍が期待される若手作家です。留学を前にした節目としての彫刻展です。

ギャラリーマン

オタクは古い

最近、モダニズムつまり近代主義を検証する企画展が目立つ。文明開化、西欧主義、戦後のアメリカイズム、この100年の欧米主義を問い直そうというのである。日本古来の文化土壌の中に、外来の文化がどのように受容されたのかを問うのである。

今日の日本人像としてよく言われる事だが、外国人の目から日本人の顔が見えない、見えてこないと言われる。又、個々のパーソナ

リティも明瞭でなく画一的で無個性だとも評される。この辺りの事もこの近代化日本の社会制度や教育などと関係が深そうだ。個々が豊かな個性を保ってこそ生き生きとしたコミュニケーションが育つはずだが。

数年前からパーソナリティの類として、オタクと言う人種がある。このオタクも実に病的な響きがあるが、何かしらクセモノと言う感がつきまとう。このオタクこそ近代主義精神の究極の人種と言えなくもない。しかし今や、オタクも古い。美術で言えば、ミニマル化し、社会性を失った現代美術に等しい。

コンセプトでテキストなしには理解しがたくなった現代美術。行きつく所まで行ってしまったと言われる現代美術だが、我々の存在と認識において重要な身体性や、生理性が視覚表現の世界から除かれてしまった感が、今日の状況としてある。しかし、この近代の検証と時期を同じくする形で美術の社会性の回復がにわかに叫ばれている。このままオタク美術が続き、“死に体化”してしまうのだろうか…。（上）

編集デスク

初めて編集という仕事に携わった。インタビューからはじまり、レイアウトや文章構成など忍耐のある作業の連続だった。特に文章構成はボキャブラリーのなさを嘆くばかりで、学生時代にもっと本を読んでおけば良かったと、今更後悔しても遅いのだが…。

次号からの発行に関してはこれからの仕込み次第、皆さんからの声、寄稿、投稿をお待ちしています。

（当間）

GALLERY WORK-II
2-2-4 IZUMIZAKI NAHA
OKINAWA JAPAN 〒900
Phone 098(855)7933

WANTED!

あなたの広告を待っています
本紙ギャラリー係 ☎098(855)7933